居待の月

ごろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
居待の月

【Ｎコード】
Ｎ４１７０Ｏ

【作者名】
ごろー

【あらすじ】
ルネ、ルナ、チャンドラ
黄色い月に、狂気が宿る

※一人コラボ企画作品。詩部分を拙作『ラプソディ・カタストロフ』にて展示中。悲しき物語は悲しき言の葉の中に。

（前書き）

一人コラボ企画作品。
ラプソディ・カタストロフの方も宜しくお願いします。

ルネ、ルナ、チャンドラ
黄色い月に、狂気が宿る

銀のひかりにあてられて
今宵貴女は何処へ往くの

◇

月にはね、女の人が居るのよ。

窓の外を見遣り乍ら、彼女はそんな事を考えていた。満月の日から幾日かが経ったお陰か、陽はもうすっかり暮れてしまったというのにまだ月は姿を見せてはいない。だから、彼女が月に居るという女を見る事は未だ叶わない。

アレは、一体誰なのか。

けれどそんな中、彼女は唯ぼんやりとある人について思考を巡らせる。遠い昔のあの夜に、月に女性が居る、と言ったあの人。黄色い月に照らされて笑っていた”彼女”を。

黄金色の髪に、翡翠の瞳。丁度彼女と同じ色なのに、何故かそれ

はとても濁って見えた。

何故。

ふつりと疑問が沸く。

何故、そんなに悲しそうな色をしているのかしら。

しかし、未だ幼かった彼女に、その理由を知る術はなかった。

あれから幾年が過ぎた。彼女の周りに溢れていた幸せは何時の間にか絶望へと変貌してしまった。５歳の時に弟を、８歳の時に父を、１０の時に母を亡くし、彼女は天涯孤独の身となっていたのだ。しかもまた、両親の遺した遺産でさえ周りの醜悪な大人達に殆ど奪われ、彼女の元にはぼろぼろのあばら屋しか残らなかった。

”悲しみに流した涙は
もうずっとまえに枯れ果てて
私はただ待っている”

彼女は堪らなくなって外に飛び出した。懐には果物ナイフを隠し持ち、冬の夜空、ネグリジェたった一枚で。

”凍えそうな程寒い夜”

彼女は街の外れに向かって裸足で一心不乱に駆けてゆく。寒さなどもう微塵も感じはしない。こんな夜なら、あの人に会えそうな気がするのだ。

”タナトスとエロースの狭間を”

夜空に明星だけが彼女を見つめて居る。未だ月が出る気配は無い。

”月はその境界線”

霞んだ視界の隅に、黄金色の髪の少女が映る。

”貴女は何方へ往くの
貴女は何方を見捨てるの”

思わず立ち止まる。彼女は込み上げて来る何かに、一瞬呼吸が出来なくなってしまった。

”いつかまた”

少女は幸せそうな笑顔を振りまいて、月の出る方を眺めている。

”死は、やって来る
死は、やって来る”

ようやく上がった居待の月が森の影から顔を出し、彼女を背後から照らす。

”時間が無いわ”

じっとりと汗が滲む。表情が引き攣ってゆくのが自分でも判る。

”死が、迫って来る
死が、迫って来る”

辺りは白く霞んで、もう何も見えないのだ。

”逃げきれはしない”

彼女は銀にひかるそれを、ただぎゅっと握り締めた。

「月にはね、女の人が居るのよ」

目の前の少女に向けて精一杯の笑顔を形成(つくり)し乍ら。

◇

ルネ、ルナ、チャンドラ
黄色い月に、狂気が宿る

銀のひかりにあてられて
今宵貴女は何処へ逝くの

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4170o/

居待の月

2010年10月20日20時20分発行